一回だけ呼ばれた名前

萩原南中学校　三年　金子　里帆

私は今まで、「家族」というものを深く考えたたことがなかった。学校から帰ると、夕食を作る母がいて、仕事から帰った父がいる。

それが当たり前になっていて、当たり前について深く考えたり疑問に思ったりすることなどなかった。でも、ある出来事があってから考えさせられたことがある。

私にはすぐ近くに住んでいる祖父母がいる。

あるとき祖父が認知症だということが分かった。もの忘れが多く、日付が分からなかったり物をどこに置いたかなどを忘れてしまったりすることがある。そして祖父はお酒が大好きな人だ。いつも度が過ぎるほど飲むので、よく泥酔していた。そうすると癇癪をおこして、祖母では手が付けられず、いつも父が止めに入っていた。私はまだ幼かったのでとても怖かったのを記憶している。祖父母の家へ行くのが正直怖かった。でも、祖母は毎日祖父のために家事をしながら面倒をみていた。私なら絶対に嫌なのに、なぜ祖母にはそれができるのか不思議だった。

ある日、家族三人で祖父母の家へ行った時のことだった。二人は何気ない会話をしていたが、その会話の中で祖父が私のことを「子ども」と言ったので、祖母が「この子の名前覚えていないの？」と聞いた。私が物心ついた頃から口数の少ない人だったので、私は祖父から名前で呼ばれた記憶が一度もがない。ましてや認知症だから仕方ないなと思っていた。ところが、祖父は「里帆」と、私の名前を言ったのだ。その時なぜか私は心が温かくなった気がした。名前を呼ばれただけでこんな気持ちになったことが今までにあっただろうか。今まで私の名前を一度も呼んでくれたことがなかったのに、認知症になってから初めて呼んでくれた私の名前「里帆」。今でもあの時感じた気持ちは忘れられない。

あのことがあってから何年か後、家での介護や支援が厳しくなり、やむなく祖父は病院で預かってもらうことになった。今までたくさん苦労をして、辛い思いをしてきた祖母だから、きっと負担が減って「ようやく楽になれた」と感じているだろうと思っていた。でも、家で一人になった祖母からは明るさが減ったように思えた。不思議に思った私は、この時初めて「家族」ということについて考えさせられた。

「家族」には、きっと特別な何かがあるのだろうと思った。認知症になった祖父が、いろいろなことを忘れているのに、私の名前を憶えていてくれていたことを思い出した。忘れることが多くなっても、私の名前を憶えていてくれたのは、きっと普段は口にしてくれなくても、私のことを大切な孫だと思っていてくれたからだ。同じように、祖母も祖父が大切な存在だと感じていたに違いない。父も母も、家は家族がいる大切な場所だと思っているから、私が家に帰ったら必ずいる。目には決して見えないけれど、家族にある特別なものとは、お互いの存在を尊重しあい、お互いを大切に思う気持ちなのだと思った。

まだ一回しか呼ばれたことはないけれど、祖父が初めて呼んでくれた私の名前のおかげで、私は家族について考えることができた。以前は「怖い」なんて思っていたけれど、今では、私にいろいろなことを気付かせてくれたり考えさせてくれたりした祖父は、私にとって大切な存在だと思っている。いつの日か私も家族をもつ日が来るかもしれない。その時ではなく、今気づくことができて、私は本当に良かったと思っている。あたりまえすぎて普段は気付かないことを気付くことができて、祖父に感謝している。いつかこのことを祖父に話そうと思っている。今度こそ私の名前なんてとっくに忘れてしまっているだろうけど、私はあの一回で満足している。